

博士論文（要約）

論文題目 日本の英語教育と文学教材—1980年代初頭から2000年代初頭までを中心に—

(Japanese English Teaching and Literary Materials from the Early 1980's to the Early 2000's)

氏名 高橋 和子

本論文は、平成 26 年度科学研究費補助金 研究成果公開促進費 学術図書を受けて、平成 27 年に刊行予定。

刊行物の名称：『日本の英語教育における文学教材の可能性』

著者名：高橋 和子

出版社：株式会社 ひつじ書房

I 論文の目的と構成

本論のおもな目的は、日本の英語教育で文学教材が減少した経緯を分析し、その事象を不相当と見なす立場に立ち、文学教材の特色および利点を示し、文学はコミュニケーション能力育成を目指す英語教育においても重要な教材であることを、理論と実践両面から示すことである。考察の対象は、おもに 1980 年代初頭頃から 2000 年代初頭頃までの期間に絞り、中学校・高等学校の英語教育にも目を向けながら、大学英語教育を中心に論じる。

本論は、序論、結論の他、7 章から構成されている。各章の詳細は以下に示すが、本論文全体を通してもっとも強調したい点は、文学教材はオーセンティック教材の 1 つであり、コミュニケーション能力育成を目指す現在の日本の英語教育でも、十分に活用できる教材であるということである。

II 各章の要約

序論

序論では、まず、身近な大学生のアンケート結果に基づき、文学教材を英語の授業で用いることに対して、彼らが概ね好意的に受け止めていることを示す。その一方で、日本の英語教育が 1980 年代以降、コミュニケーション能力育成重視に変わった背景の下、文学教材が排除されてきた状況を説明する。さらに日本では、「実践的コミュニケーション能力」が狭義に解釈され、実用主義と結びついた結果、すぐに役立つような教材志向に向かった可能性を指摘する。

第 I 章

第 I 章では、コミュニケーション能力育成に主眼を置くようになった日本の英語教育を背景として、中学校、高等学校、大学ではどのような教材が使用されてきたかに注目する。これらから確認する点は、1980 年代以降日本の英語教育の中心目標がコミュニケーション能力育成に収斂していった一方で、すぐに役立つように見える英語を扱う教材が増加し、文学教材が減少していったという実情である。

第 II 章

第 II 章では、近年、海外の英語教育・外国語教育界で文学教材がどのように扱われているかに注目する。そして、文学教材を日本のように敬遠する国（韓国・中国）がある一方で、CLT 発祥の国と言われるイギリスや、アメリカでは、文学をオーセンティック教材と見なして、外国語教育の場で活用していると指摘する。

第 III 章

第 III 章では、コミュニケーション能力育成を目標に掲げながらも、日本の英語教育では、なぜ文学教材を活用してこなかったのか、その理由を考察する。まず、オーセンティック教材のとらえ方を 2 通りあげ、1) 本来の意味で解釈した場合と、2) 狭義に解釈した場合を提示する。そして、日本では一般的には 2) の解釈を行なった場合が多いとする。次に、このような解釈に影響を与えたと思われる時代背景を分析する。加えて、本論のオーセンティック教材に対する、基本的な立場を確認する。すなわち、オーセンティック教材という概念が本来の意味で解釈された場合、この概念自体に問題はない

が、オーセンティック教材の概念が狭く解釈された結果、文学が排除されるという極端な事態が生じており、この点は是正すべきであるという立場である。

第IV章

第IV章冒頭では、これまでの議論を踏まえて、「オーセンティック」教材と文学教材の間にはまったく接点がなく、これらは対照的な教材なのか、という疑問を投げかける。その上で Carter and Nash (1990) による“literariness”の概念を基準にして、「オーセンティック」教材と文学の関係を見る。その結果、「オーセンティック」教材の題材になることが多い雑誌記事の中には、文学の理解を前提として執筆されたものがあると指摘する。そして、文学を英語教育から排除することは、書き手のメッセージを正しく理解すること、ひいてはコミュニケーション能力を育成する上で、最善の策とは言い難いと主張する。

Cf: Carter, Ronald, and Walter Nash. (1990) . *Seeing through Language: A Guide to Styles of English Writing*. The Language Library Ser. Oxford: Basil Blackwell.

第V章

第V章では、日本の英語教育で「オーセンティック」と見なされることが多い題材には、どの程度 creativity が見出せるかを検証する。はじめに、本論における creativity の意味を定義づける。次に、この定義に従って、creativity をふんだんに含んだ教材はコミュニケーション能力育成を目指す英語教育に有益だと論じる。さらに、「オーセンティック」教材中心に編纂された英語教科書にも、実は creativity を含んだテキストが選ばれていることを示した上で、creativity を十分に含んだテキストを提供するためには、文学の方が適切だと述べる。次に「オーセンティック」教材として選ばれることが多い題材を例にとり、そこに含まれる creativity を分析する。そしてこれらの題材は、文学の理解を念頭に置いているものが少なくない点を明らかにする。加えて、近年の文学作品の中には、文字の力を十分に活用し新たな時代に対応しながら、creativity に富んだテキストを生み出している例もあると述べる。

第VI章

第VI章では、まず本論における narrativity の定義を示し、次に narrativity を含んだ教材は、コミュニケーション能力育成のための活動に活用しやすいと主張する。そして「オーセンティック」教材中心に編纂された英語教科書にも、実際は narrativity を含んだテキストが選ばれていると指摘する。その上で、narrativity を含んだ題材を提供するためには、文学の方が適切だとする。その理由として、文学は「オーセンティック」教材の題材と比較して、十分に story を展開し、豊かな文脈を作り上げることが多い点をあげる。さらに、文学は映像や音声といった視聴覚的な要素に頼ることが少なく、文字を中心として narrativity をふんだんに含んだテキストを構成していることも示す。

第VI章最後では、第IV・V・VI章のまとめを行う。ここでは、“literariness” (Carter and Nash, 1990), creativity, narrativity の観点から見ると、「オーセンティック」教材と文学教材の間には接点があり、まったく関連性を持たない対照的な教材ではないと主張する。加えて、creativity・narrativity を豊かに含んだ教材がコミュニケーション能力育成のための活動に有益である点を踏まえると、文学教材を英語教育から排除してきたこれまでの日本の英語教育のあり方には、再考の余地が大いにありと主張する。

第VII章

第VII章では、さまざまな工夫を加えれば、コミュニケーション能力育成を目指す英語の授業で、文学教材を上手く活用できることを示す。実践例を示す前に、まず、従来型の文学教材のメリット・デメリットを分析する。次に最近の文学教材の特色を踏まえて、コミュニケーション能力育成を目指す英語教育において、文学を十分活用するための方策を考察する。その上で、大学、中学校・高等学校の英語教育において、“literariness” (Carter and Nash, 1990), creativity, narrativity を豊かに含んだ文学教材を活用するための方法を提案する。

III 目次 (図表一覧, 参考文献などは省略)

序論.....	1
1. 英語教育で文学教材を使用することに対する大学生の意見 —2008年度から2011年度のアンケート結果を踏まえて—	1
2. 本論の目的	3
3. 考察の対象	3
3.1 期間	3
3.2 教育機関.....	4
4. 用語の定義	4
4.1 文学教材, および題材と教材	4
4.2 文学教材を使った英語教育	4
4.3 オーセンティック教材と「オーセンティック」教材.....	6
5. 1980年代初頭から2000年代初頭までの日本の英語教育—『中学校学習指導要領』 および『高等学校学習指導要領』の記述を中心に—	7
5.1 「目標」の変遷	7
5.2 「実践的コミュニケーション能力」はどのように解釈されたか	10
5.3 「教材」	12
6. コミュニケーション能力育成と文学教材.....	16
6.1 文学教材の敬遠と題材規定—『高等学校学習指導要領』を中心に—	16
6.2 文学教材敬遠を生み出した多様な遠因—授業時数と新語数の削減, 大学設置 基準の大綱化, 「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」—.....	17
7. 本論の構成.....	20
註 (序論)	22
第I章	
コミュニケーション能力育成を目指す英語教育と文学教材	
—中学校, 高等学校, 大学の読解教材を中心に—	30
1. 中学校の英語教科書と文学教材—読解教材を中心に—	30
2. 高等学校の英語教科書と文学教材—「リーディング」を中心に—	35
3. 大学の英語教科書と文学教材—大学設置基準大綱化以降を中心に—	47
3.1 大学設置基準の大綱化以降の大学英語教育.....	47
3.2 大学の英語教科書と文学教材	48
註 (第I章)	51
第II章	
海外の英語教育および外国語教育における文学教材	
1. EFL環境にある国々—韓国, 中国の事例を中心に—	53
2. 英語を母語とする国々—イギリス, アメリカの事例を中心に—	57
2.1 イギリスの外国語教育と文学教材	57
2.2 アメリカの外国語教育と文学教材	59
第III章	
日本の英語教育におけるオーセンティック教材の解釈	
—1980年代から2000年代に起きた出来事を踏まえて—	63
1. オーセンティック教材とは何か	63
1.1 オーセンティック教材の本来の意味	63

1.2	オーセンティック教材と CLT	64
1.3	日本の英語教育とオーセンティック教材	66
1.4	オーセンティック教材と「オーセンティック」教材	70
2.	「オーセンティック」教材の概念形成上、直接的・間接的に影響を与えた事象	
	—1980年代から2000年代初頭を中心に—	72
2.1	国際競争の激化と経済界からの提言	72
2.2	“World Communications Year: Development of Communications Infrastructures” (1983年)	74
2.3	JETプログラム(1987年開始)とALT	78
2.4	ITの発展—コーパスの普及を中心に—	81
2.4.1	コーパスの意味	82
2.4.2	<i>A Comprehensive Grammar of the English Language</i> と <i>Collins COBUILD English Language Dictionary</i>	82
2.4.3	コーパスと日本の英語教育	85
註	(第III章)	88

第IV章

	「オーセンティック」教材と文学教材の接点(1)	
	—Carter and Nash (1990), “literariness”を端緒として—	90
1.	Carter and Nash (1990) の“literariness”	90
2.	「オーセンティック」教材の題材と“literariness”—雑誌記事を中心に—	92
3.	“literariness”以外の尺度を求めて—creativity と narrativity—	96
註	(第IV章)	98

第V章

	「オーセンティック」教材と文学教材の接点(2)	
	—creativity を中心に—	100
1.	creativity の意味の変遷	100
1.1	神から人間が持つ能力へ	100
1.2	多彩な領域で用いられる creativity という概念	101
2.	creativity の定義	102
2.1	既存の言語表現を踏まえて新たな表現を創造すること	103
2.2	ユーモアと関連性を持つこと	104
2.3	creativity を理解する相手が必要なこと	105
2.4	さまざまな尺度で解釈が可能であること	106
2.5	程度で量る特色であること	106
2.6	本論における creativity の意味	107
3.	creativity と、コミュニケーション能力育成のための英語教育	107
4.	「オーセンティック」教材重視の教科書と creativity	109
4.1	大学英語教科書	109
4.2	高等学校「リーディング」用教科書	112
5.	「オーセンティック」教材の題材と creativity (1)	
	—文学作品の理解を前提とする例を中心に—	115
5.1	既存の言語表現を踏まえて新たな表現を創造する例	115
5.1.1	文学の登場人物名を素材にした例	
	—メルヴィル(Herman Melville)の <i>Moby-Dick, or the Whale</i> を中心に—	116
5.1.2	文学の作品名を素材にした例	
	—ウルフ(Virginia Woolf)の <i>A Room of One's Own</i> を中心に—	118
5.2	ユーモアと関連性を持つ例	120

5.2.1 文学作品を素材として、ユーモアを込めた表現を作り出した例	120
・トウェイン (Mark Twain) のハックルベリー・フィンと「タックルベリー」	120
・カポーティ (Truman Capote) の <i>Breakfast at Tiffany's</i> と「カロリーメイト」	122
・シェイクスピアの <i>Romeo and Juliet</i>	124
6. 「オーセンティック」教材の題材と creativity (2)	
—最近の文学作品との比較—	129
6.1 日常会話の例	129
6.2 雑誌広告の例	130
6.3 文学作品の中の会話の例	134
註 (第 V 章)	137

第 VI 章

「オーセンティック」教材と文学教材の接点 (3)	
—narrativity を中心に—	139
1. 多彩な領域における narrative	139
1.1 narrative と日常性	139
1.2 多彩な領域における narrative—文学から政治まで—	140
2. narrativity の定義	142
2.1 narrativity の特色	142
2.2 本論における narrativity の意味	144
3. narrativity と、コミュニケーション能力育成のための英語教育	145
4. 「オーセンティック」教材重視の教科書と narrativity	146
4.1 大学英語教科書	146
4.2 高等学校「リーディング」用教科書	148
5. 「オーセンティック」教材の題材と narrativity	
—新聞記事、テレビ・コマーシャル、日常会話を中心に—	149
5.1 新聞記事	150
5.2 テレビ・コマーシャル	152
5.3 日常会話	157
5.4 雑誌記事	160
6. 「オーセンティック」教材と文学教材の接点	
—第 IV, V, VI 章の分析結果を踏まえて—	163
註 (第 VI 章)	165

第 VII 章

文学教材を使った英語教育の実践例

—大学から、高等学校、そして中学校まで—	167
1. 大学の英語教育における文学教材	167
1.1 IT 世代の大学生たち	167
1.2 従来の大学英語教育用文学教材	170
1.3 最近の大学英語教育用文学教材	175
1.4 最近出版された、大学英語教育用文学教材	176
1.4.1 <i>English through Literature</i>	176
1.4.2 <i>Simply Shakespeare—Two Tragic Stories: Hamlet and Romeo and Juliet—</i>	177
1.4.3 『名文で養う英語精読力』	179
1.4.4 海外で出版された文学教材—Bookworms Club Series を中心に—	180
1.5 近年出版された文学教材がこれからの文学教材に与える示唆	182
1.5.1 リトールド版は文学教材か?	182

1.5.2	文学教材に基づいた練習問題は、どのように作成するのか？	185
1.5.3	文学教材を用いた今後の英語の授業に求められる点	188
2.	文学教材を用いた大学での英語教育（1）	
	—統一教科書、 <i>Global Outlook 2: Advanced Reading</i> を中心に—	188
2.1	使用教科書と授業の概要	189
2.2	物語の結末を書き換える—“Lost Keys”を中心に—	190
2.3	その他の短編小説を使った授業	196
2.3.1	紙芝居でクライマックスを語る—“A Clean Break”を中心に—	196
2.3.2	日本語を取り入れた課題—“Crickets”を中心に—	199
3.	文学教材を用いた大学での英語教育（2）	
	—既成の教科書と自作教材を組み合わせた例を中心に—	201
3.1	<i>Signature Reading: Level G</i> と自作教材	201
3.1.1	使用教科書と授業の概要	201
3.1.2	出来事のつながりを考える	
	—“The Crane Maiden”と“Blue Beard”を使った授業—	202
3.1.3	文学教材はプレゼンテーションを取り入れた授業形態で扱えるか	
	—“The Midnight Visitor”を中心に—	210
	・プレゼンテーションを取り入れた授業案	210
	・“The Midnight Visitor”を使った授業例	212
4.	文学教材を用いた大学での英語教育（3）—自作教材を中心に—	216
5.	中学・高等学校の英語教育における文学教材	223
5.1	中学・高等学校の英語教師は文学教材をどのように見ているのか	223
5.2	文学教材を用いた中学・高等学校での英語教育（1）	
	—教科書で扱われている文学教材の教え方—	229
5.2.1	教案作成上、考慮する点	
	— <i>The Fall of Freddie the Leaf</i> を中心に—	229
5.2.2	教科書で扱われている文学教材の教え方	
	— <i>The Fall of Freddie the Leaf</i> を中心に—	230
5.3	文学教材を用いた中学・高等学校での英語教育（2）	
	—1回の授業で扱う文学教材—	236
5.3.1	中学校で <i>Alice in Wonderland</i> を使う授業案	236
5.3.2	中学校・高等学校で日本昔話を使う授業案	241
5.4	文学教材を用いた中学・高等学校での英語教育（3）	
	—授業時間最後の5分間で使える文学教材—	245
5.4.1	creativity に関する章であげた例を中心に	245
5.4.2	文学の登場人物名や作品名などを素材にした例	
	—写真や絵を中心に—	245
註	（第VII章）	251
結論		255
1.	要約	255
2.	改善点と課題	257
3.	文学教材はどこへ行くのか	259